

『暮しの手帖』と花森安治の素顔
目次

第

VI

部

あとがき	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	
	『通販生活』とカタログハウスの商品テストの難しさと問題	直販部数一万部の落ちこみ	消費者像の変化	花森の生活思想と現在の問題	『暮しの手帖』と現在の生活思想	花森の個人史	花森と淀川長治	装釘家としての花森	花森と大政翼賛会	花森と生活社	平凡出版の岩堀喜之助と清水達夫	花森松三郎とろまん文庫	花森の世代と戦後の雑誌の時代	会社のあり方	花森と齋藤十一	戦前の婦人雑誌の世界	『婦人画報』と東京社			
178	173	170	167	165	162	159	157	154	151	147	145	142	138	136	133	131	128	126	124	

『暮しの手帖』と花森安治の素顔

第
I
部

1 前口上

—— 今回は『暮しの手帖』の編集者だった河津一哉さんと北村正之さんにお越し頂きました。

河津さんは一九五七（昭和三二）年、北村さんは六九（昭和四四）年に入社されています。そこで主として五七年からのことを河津さん、六九年以後のことを北村さんからお話し頂き、五〇年代から九〇年代にかけての花森安治と『暮しの手帖』の周辺の事柄をうかがっていくつもりでおります。

これは北村さんと一緒に『花森安治戯文集』などを出版しているLLPブックエンドの中村文孝さんから聞いたのですが、もはや花森を直接知っている人も少なくなっているとのことですね。

河津 本当に知らない人が増えましたね。

北村 それでもまだ若干は残っていると思いますけど。

—— そのことに関しては象徴的な光景を見たばかりです。テレビで『とと姉ちゃん』



をやっているからでしょうが、公共図書館で『暮しの手帖』フェアをやっていた。

ところがそのフェアの中で最も多いのが松浦弥太郎の本で、十冊ほどが陳列されていた。これはまずいなと思いました、今だとそうなるでしょうんですね。

そこで今回はこれまでの特異な雑誌と伝説的編集者という従来のストーリーとは若干異なる、花森と『暮しの手帖』の固有の関係、及び花森という存在に関して、お二人から語って頂きたいと思います。

まず河津さんが一九五七年に入社した時のことからお聞きしたい。『一匁五厘の旗』の中で、若くして亡くなった編集者の林澄子への追悼の一文「世界はあなたのためにはない」がありますが、彼女とは同期入社ですよ。

2 河津入社事情

河津 ええ、そうです。一九五七年に初めての公募で暮しの手帖社に三人入りまして、女性が林さん、男のほうが私と宮岸毅さんだった。

—— どういう経緯と事情で、河津さんは入社されたのでしょうか。そこら辺のストーリーをうかがいたいのですが。

河津 私は熊本出身なのですが、東京に出てきて親戚の家に下宿した。その親戚は裁判所勤めで転勤していたので、私が留守番のようなかたちで住み始めた。その家に『暮しの手帖』の初期の古い号があった。

第7号で、それは小紋の柄の特集でしたけど、すごくハイカラで、「亡びるにせよ、亡びぬにせよ」に始まる花森署名の「前書き」を読んでびっくりしてしまった。フェミニズムというのか、花森さんが影響をうけた平塚らいてうらの思想が顔をのぞかせている。

—— 7号といいますが、まだ『美しい暮しの手帖』の時代ですね。

河津 そうです。五三年の22号から「美しい」がとれて、『暮しの手帖』になっていま

すから。

—— その河津さんが手にした当該号は入手できませんでしたが、北村さんがここに創刊1号から3号まで、それから当時の増刊号的な『家中みんなの下着』を持参してくれましたので、それらの表紙を掲載しておきたいと思います。

河津 これは懐かしいですね。暮しの手帖社にはバックナンバーが揃っていましたが、個人では持っていませんでしたので。

北村 かなり前に古本屋で入手したんですが、さすがに七十年前のものであるだけに、痛みが生じています。

—— でも今では古書市場でも入手は難しいでしょうし、こうして実物を見ることができただけでも幸運だと思わなければ。

河津さんが最初に読まれたのも、同じ判型だったんでしょうね。

河津 ほぼ同じですが、ページ数は増えていたはずですよ。巻末に「1号からの項目別総目次」としてバックナンバーの記事の目次がついていましたから。